

# 日本看護歴史学会 会報

日本看護歴史学会  
第 17 号  
1994年3月5日

## あえて看護史研究の

## あり方に苦言を呈す

亀山 美知子

近年の看護界は研究の大流行の感がある。看護史に関する研究も某雑誌などには頻りに掲載されているし、いくつかの学会でも研究発表の場が設けられている。これらの傾向は、看護史に関心を寄せる者にとっては喜ぶべきことといえるが、反面、一抹の危惧を抱く場合もある。すなわち、編集者は研究者とは限らない。従って、執筆者の論文等について十分な審査は期待できない。看護史に関する既発表論文等の確認は難しい。また、時として専門誌の域を離れ、単なる商業雑誌化していると思えるものさえある。また、看護関係の学会で取り上げられる看護史に

関しても、問題なしとはいえない

のではなからうか。趣味としての歴史なのか、研究としての歴史なのかは、選考の過程によって決まる。

日本看護歴史学会は、当初よりなだらかな会として歩みはじめたが、すでに今年で八年目を迎える。歴史が好きであるとか、関心をもっている、等々の動機で入会された方も多し、何らかの歴史をまとめるために入会された方もあろう。様々な目的で入会された方が歴史に興味をもち続けられることは大切である。

しかし、本会は看護史の専門の学会としての方向を目指すものであることも事実である。ただ、だからといって、所謂、権威主義的

な体質やムードとは無縁の活動を続けて来たつもりであるし、その運営方式については多くの御支持を得ていると信じる。要するに人的交流は大切に、しかし研究内容は充実したものに、との思いを各人がもっているからである。

さて、このたび学会誌の査読規程の見直しが行なわれた。査読の目的は、勿論、歴史論文としての基本をふまえ、その価値を高めることにある。それらについて要約すると(1)論文の形式上の問題、(2)論文の内容ということに大別できる。

(1)については、歴史は単なる記述ではなく、叙述であることを思い出して頂ければ納得できることである。すなわち、単なる事実の羅列ではなく、自らの歴史観に基づいた叙述が求められるものである、と認識してもらいたい。近年、所謂、総論的な研究指導の弊害によって「〇〇の視点から」等といった記述をみかけるが、そのような表現をあえてする必要はない。論文に一貫性があれば、読み手には十分把握出来るものであるはずだからである。

また、叙述である以上は初步的な文章構成、誤字、脱字等については十分、考慮すべきものである。

し、最も大切なことは註釈が適切に書かれているかである。註釈や引用、参考文献は大切な読者へのメッセージであり、自らの研究の過程を明らかにするものであることを認識しなければならない。

参考文献と研究文献の区別も読み手にとって判別できることも大切であろう。

(2)については、論文構成(展開)、十分に先行研究(研究史)をふまえているか、内容に独創性や一貫性(前出)がみられるか、という点である。他者の論述に依拠するだけでは当然ながら、自らの視座を明らかに出来ない。また、専門用語についても熟知する必要はあるが、看護史に関してはまだ確立をみない。従って手軽な『日本史辞典』等を利用することも基礎的な準備になるだろう。

以上が査読の主要事項であるが、査読の目的は単に論文を選別することではなく、書き手と読み手が共に成長することである。

そのためにも、双方は歴史論文、専門書に常日頃から馴れ親しむ必要がある。看護の視点のみにこだわるよりは、歴史研究の基礎を身につけた上で、独自の見解・解釈を可能にするよう心がけたいものである。

# 第八回日本看護歴史学会大会予告

「今、あらためて、看護教育の歴史を考える」

現在、看護教育の歴史は一大転換期にあるといえます。その質的・量的変節期にあつて、本会はある看護教育の歴史をふり返るとともに、それぞれの時代に果たした看護教育の目的・役割等々を検証するとともに、今後の看護教育への展望も模索したいと考え、メインテーマを決定しました。

また、このテーマのため、日本で最初の近代的看護教育発祥の地の一つである旧帝大医科大学（現東大医学部）の構内を会場に決定いたしました。今回は日程が例年の土・日曜日ではなくりましたが、奮って御参加下さい。

## △主要プログラム▽

### ◆先達に聞く「放談会」

「今、あらためて看護教育の歴史をふりかえる」

発言者

吉田時子氏（聖路加出身者）

國分アイ氏（日赤出身者）

鈴木一子氏（東大病院出身者）

いづれも、日本の伝統的な看護教育施設の御出身です。お三方の出身校の歴史とともに、それぞれの歩まれた中で得られた貴重な感懐とともに、今後の看護教育への展望や提言を期待したいものです。

### ◆会員による研究発表

応募切りは六月末日予定

### ◆分科会の開催

分科会の話題提供者を募集します。（四頁参照）

### ◆懇親会（昼食会を予定）

※詳しくは会報第一八号に発表します。乞御期待！

- ◆開催期日  
本年八月一九（金）、二〇日（土）
- ◆会場  
東京大学山上会館  
東京都文京区本郷七-3-1
- ◆参加費（両日有効）  
会員 二千元  
非会員 三千元

## 日本看護歴史学会第7回大会 収支決算報告書

<収入>	
大会参加費	308,000
会員	2,000×52名=104,000
非会員	3,000×68名=204,000
サンドイッチパーティ代金	74,000
会員	1,000×39=39,000
非会員	1,000×35=35,000
大会総会費	50,000
合計	432,000
<支出>	
会場費	35,000
講師謝金・お車代（2名分）	135,000
サンドイッチパーティ代金	56,537
事務・通信・雑費	6,650
合計	233,187
<差し引き残高>	
432,000 - 233,187 =	198,813
<累積残高>	
前年度までの繰り越し金	342,020
本年度残高	198,813
累積残高	540,833

（次年度大会費用へ繰り越し）

（会計 依田和美、大平政子）

### 雑感「田淵まさ代と

### 井上澄恵のこと」

高田節子

岡山で住むようになってからと

いうもの岡山と書いてあるとすぐ気になるものである。「岡山県出身日赤看護婦長田淵まさ代（一八八五〜一九七六）大正一〇年ロンドンへ留学」エー岡山！一段と活字が大きくなって筆者をとらえた。

同県人だ。どこで語学を学んだの  
だろう、あの時代に、と一挙に興  
味や関心が湧いた。まさ代が私立  
津山高等女学校を卒業した明治三  
七年、日露戦争が勃発。時の山陽  
新報は毎日のように戦況を掲載、  
五月二五日には日本傷病兵救護の  
ため広島予備病院へ向かうマギー  
女史一行の岡山駅通過を愛国婦人  
会・篤志看護婦人会は盛んに歓迎  
するよう通達もあり、まさ代も  
この記事を目にしたのだろうか。

お国のために役立ちたいと一願  
発起、日赤本社病院看護婦養成  
所へ進学、以後生涯をかけて日赤  
事業に尽くすことになる。受賞や  
経歴の主なものあげると明治四  
四年ナイチンゲール石黒記念牌受  
賞。大正元年看護婦長に昇進前述  
の国際公衆衛生看護講習会に参加  
帰朝後、語学の必要性を痛感して  
日赤看護婦の教科課程に語学を加  
えることを進言する一方、語学生  
の制度を加えることも強調。大正  
一二年宮内庁より自動車事故で負  
傷した北白川宮妃殿下の看護の用  
務を託され、約一年フランスへ出張  
そのまさ代の要請に応じ日赤は、  
大正一四年、看護婦外国語学生規  
則が制定する。昭和一二年ナイチ  
ンゲール記章受賞。昭和一四年看  
護婦副監督に昇進。昭和二〇年看

護婦監督に昇任後依願退職。故郷  
岡山へ帰った。

まさ代の残した功績は多くの看  
護婦の教育指導にあたり立派な後  
輩を育てていることがあげられる  
が、中でも外国語学生規則が制定  
されたことは大きな業績であるとい  
える。外国語学生として津田英  
学塾へ内地留学した人の中に井上  
澄恵の氏名がみえる。この井上澄  
恵こそ筆者が初めて就職した年、  
徳島大学病院へ総看護婦長として  
赴任され、新しい看護の指揮者と  
して活躍され、英語の話せる総婦  
長さんであった。戦後間もない昭  
和二八年のことである。戦時中英  
語は敵性語であり、学ぶことがで  
きなかったわれわれには不思議な  
存在であった。筆者は何も分らな  
い新米で人一倍よく叱りとばされ  
反面、よく可愛がられたものだっ  
た。

故人となつてしまわれた井上澄  
恵であるが四〇年前のことが懐か  
しい。時間を取り戻せるものなら  
また叱ってもらいたい。このよう  
にして田淵まさ代の残した業績を  
井上澄恵らから受けた私は、岡山  
での勤めを意義あるものにした  
と考える昨今である。

なお、名著『日本女性史』(岩波)  
の著者 井上清は井上澄恵の実弟。

## 「ひもといた歴史」

柳田 恵子

昨年の夏、はじめて本学会に参  
加し、大変な刺激をうけた。私の  
仲間である兵庫県下一五校の教務  
主任が全員参加し、感想としては  
「学会らしい学会に参加できた気  
がする」であった。人間だれもが  
歴史に興味をもち、生活の「道し  
るべ」にしているのだが、あらた  
めて歴史と聞くと、食わずぎらい  
の感がある。実のところ、私自身  
も准看学校で看護史を担当するま  
では、なるべくさけて通りたい気  
持ちであった。しかし当学会では、  
小規模ながらも、集った人々にわ  
かりやすく報告され、ぐいぐいと  
引き込まれるような魅力を感じた。

身近なところから歴史をひもと  
てみると、今、盛んに廃止が叫ば  
れている准看護婦制度は、現場の  
強い要求から制定されたのである。  
その時点では、社会のニーズに合  
った最良の手だてであったと考え  
る。看護協会の打ち出している准  
看護止に対しては、高度医療に対  
応できる看護職者の育成が必至で  
あり、理論的には賛成である。し  
かし、為すすべをすっかり打ち出

し、構想・計画を提示していただ  
かないと、当業者はとてむつらい  
思いをしているのである。

最近、学校教育で「新しい学力  
観」が提唱された。従来の学力観  
は「知識・理解」の量を重視し、  
何でも数量化して評価する方向に  
進み、いわゆる偏差値万能の偏っ  
たものである。このような人間の  
一面しか見ない評価で、人間の価  
値が決められるような風潮にまで  
なっていた。

そこで新しい学力観の観点は  
「知識・理解」よりは「自ら学ぶ  
意欲の育成や思考力、判断力、表  
現力」あるいは「関心・意欲・態  
度」などを重視する姿勢を一層鮮  
明にしている。看護婦養成の学校  
でも、このような観点で取り組ま  
なければならぬと考える。

看護界は今、大学があちこちに  
設置され、志願者が殺倒している。  
照準がレベルアップにしばられ、  
感性の部分が欠落した教育になっ  
ては、援助を受ける側は迷惑なこ  
とである。

先人が積み重ねて来た歴史を  
ふりかえり「礎」として、よりよ  
い進歩があれば、幸いである。  
最後に歴史にふれる機会を与え  
てくださったことに感謝する。

事務局だより

◆新入会員（敬称略）

中嶋律子 614 八幡市八幡神原一  
二

◆会員番号の確認のお願い

一九八九年入会の会員番号八九  
一〇〇一〜八九一〇〇九（安藤広  
子氏より大村春子氏まで）の方は、  
この年の入会番号は現在の名簿  
（九二年度版）記載の番号が正し  
いものです。お手持ちの会員証の  
番号を御確認のうえ、訂正をお願  
いします。

本会の入会者番号は、その入会  
年の一月一日より順次確定いたし  
ますが、八九年の時点でミスがあ  
り、御迷惑をおかけすることにな  
りました。お詫びいたします。

◆事務局の移転について

今期の幹事の異動に伴い、事務  
局担当は、すでに発表したとおり  
鶴沢陽子・草刈淳子両幹事ですが、  
諸般の事情により、移転が遅れま  
した。四月より事務局業務は千葉  
で開始予定です。

◆ 本会機関誌の国会図書館への  
納入、はじまる

機関誌『日本看護歴史学会誌』  
は、これまでより内容の充実をめ  
ざして参りましたが、このたび創  
刊号より第六号までを国会図書館  
に納入を決定し、開始しました。  
第七号よりIBNが記載できると  
思われますが、さらに学術誌とし  
ての充実をめざしたいものです。

看護史一口メモ ⑥

J・C・ベリーといえは京都看  
病婦学校と同志社病院に深くかか  
わった宣教医であり、明治五年来  
日から二一年間にわたり、医療と  
監獄事業等に携ったことで知られ  
る。その業績を顕彰するために刊  
行されたのが大久保利武著『日本  
に於けるベリー翁』（昭和四年刊）  
である。この中には様々な逸話が  
あるが、中でも富永ハルの思い出  
には、診療所勤務のある日、朝七  
時半の礼拝を医員たちがサボった  
ため、代りに富永がベリーに叱ら  
れるのを医員たちが「いい気味だ」  
と聞いて囁きたたのを、ベリー  
は知っていて、富永には医師の扱  
い上のことだと許しを乞うた、と  
述べられている。（か）

分科会話題提供者の募集

第八回大会の案内欄でも触れま  
したが、分科会の話題提供者のお  
申し出をお願いする時期が参りま  
した。昨年は八分科会が開かれ、  
活発な意見交換がなされました。  
今年も一人でも多くの方が話題提  
供者となって下さることを期待し  
ております。次の要領で担当者ま  
で御連絡下さい。

- 一、内容・研究テーマ
- 要旨とPR（百字以内）
- 二、提出期限 六月末日
- 三、宛先 151 東京都渋谷区代々木
- 四 一二六―九―409 五十嵐方

編集後記

昨年続き、今年も大会開催の  
案内を早目に発表することが出来  
た。御予定をお立て下さい。（か）

日本看護歴史学会会報第一七号  
発行責任者  
602 京都市上京区河原町広小路西入  
府立医大医療技術短期大学部  
玄田公子 岡山寧子  
編集責任者 亀山美知子

615 日本看護歴史学会事務局  
右京区西院月双町111―309 亀山方

伝説をはるかにしのぐ感動の生涯！  
クックのナイティンゲール正伝——ついに刊行！



# ナイティンゲール

【その生涯と思想】

サー・エドワード・クック著 中村妙子・友枝久美子訳  
A5判 各・400頁平均 定価各巻・3300円  
第I・II巻—好評発売中/ 第III巻—4月刊

時空出版 〒112 東京都文京区小石川4 18 3  
☎03 3812 5313

Sir Edward Cook : *The Life of Florence Nightingale*

没後3年目に出版され、すべてのナイティンゲール伝  
のもととなった定本。伝説をくつがえす情熱的な実像を  
よみがえらせる。理想を求め苦しむ若き日、上流家庭に  
逆い看護の道に踏み出したとき起こったクリミア戦争。  
苦痛に耐え雄々しく死にゆく兵士への共感から始まる官  
僚制との生涯の戦い。仕事に自己表現を見出した女性の  
先駆者で、近代看護を築いた精神は今日にこそ理解される。  
第I巻はクリミア戦争終結まで。第II巻は兵士らのた  
めの陸軍の改革、各国の病院再建、看護学校の創設過程  
等を記し、その手腕は一気に読ませる面白さである。